



(1) 緑友ハーモニー運営体制

幹事長: 小林 力 (5回生)

幹事楽譜係: 上田啓子 (15回生)、幹事会計係: 油井千津子 (15回生)

パートリーダー: 矢島多恵子 (ソプラノ)、山下ユミコ (アルト)

河野通久 (テナー)、上田昌紀 (バス)

(2) 新型コロナウイルス感染予防のため練習日程大幅変更

ご承知のように、2月末からすべての練習、軽井沢合宿、老人ホーム慰問も中止となり、今の情勢ではいつ練習を開始できるか見当がつきません。練習日程表には、記録のためにすべてのキャンセル分も載せています。10月以降の会場も押さえてありますが、使えるかどうか未定です。

(3) 今後の練習日程

10月、11月、12月の練習日、会場は次のテーブル記載のとおりです。なお、練習日程は緑友ハーモニーのホームページでも見るができます。

2月28日 (金)	10:00 ～ 12:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
3月6日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
3月13日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
4月10日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
4月17日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
4月24日 (金)	10:00 ～ 12:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
5月8日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
5月22日 (金)	10:00 ～ 12:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
5月23日 (土)	緑友同窓会	中止
6月12日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
6月26日 (金)	10:00 ～ 12:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
7月10日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
7月24日 (金)	10:00 ～ 12:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
8月14日 (金)	18:00 ～ 20:00	夏休み
8月28日 (金)	10:00 ～ 12:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
9月10日～11日		軽井沢合宿は新型コロナ感染予防のため中止
9月11日 (金)	18:00 ～ 20:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
9月25日 (金)	10:00 ～ 12:00	新型コロナウイルス感染予防のため中止
10月9日 (金)	18:00 ～ 20:00	緑が丘文化会館・第11研修室 (別館2階)
10月23日 (金)	10:00 ～ 12:00	緑が丘文化会館・第11研修室 (別館2階)
11月13日 (金)	18:00 ～ 20:00	緑が丘文化会館・第1レクホール (本館3階)
11月27日 (金)	10:00 ～ 12:00	緑が丘文化会館・第1レクホール (本館3階)
12月11日 (金)		クリスマス(?)

(4) 老人ホーム慰問

老人ホームの慰問は10月28日(水)の午後に決まっていたましたが、別途ご案内のとおり今年は中止となりました。施設の改修があり、入所者が別の施設に移動したことから来年も中止になります。その後どうなうかは未定です。

(5) 9月号のひまつぶし

「続・小国民の歌」

First Light

住山一貞

小林 力

「続・少国民の歌」

住山一貞

楽しい歌を期待していた私たちの前の黒板に書かれたのは、こんな歌詞でした。

「勝ち抜くボクラ少国民」歌いだしは曲名と同じです。次がスゴイ。

「天皇陛下の御為に死ねと教えた父母の、赤い血潮をうけついで、」いくら戦時中でもそんなことを教える親はいなかったと思います。

「心に決死の白襷、掛けて勇んで突撃だ。」ここでいう「白襷」とは、日露戦争の時、旅順要塞攻撃のため、肉薄攻撃隊を募りますが、彼らが白襷を掛けていったことによります。多分味方の識別のためにした事と思います。ロシアの機関銃攻撃にあって全滅してしまうのですが、それ以来、白襷を掛けるというのは軍隊以外でも、決死の気持ちで何かをするという意味で使われるようになりました。(多分、「坂の上の雲」には書いてあると思いますが調べるヒマがありませんでした)

歌の最後は「敵の本土の空高く、日の丸の旗たてるのだ。」と終わります。毎日のようにB29が頭の上を飛び、下手すると艦載機の「P公」に狙われるというのに、よくもこんなノーテンキな歌詞を唄わせたものです。しかも短調。先生の熱意に反比例して、教室の空気は物悲しい感じになって行きました。

この歌も全国的に普及されたようです。二十年くらい前、演出家の妹尾河童氏が自伝的小説「少年H」という本を出しています。舞台は神戸。多分小学校高学年だったH君は、仲間と山奥に疎開しています。そこに低学年で、家にいる妹が訪ねて来ます。H君は川のほとりで妹のために「メダカの学校」か何かを歌ってやります。すると妹は、学校では最近そんな歌は唄わな

いと言って「天皇陛下の御ために」と唄いだすのです。それを聞いて、少年Hが驚くというシーンがあります。

こんなひどい歌を作ったのはだれだ。この場合歌詞のほうに責任が大きいと思って作詞者を調べましたが良く判りませんでした。公募した方かもしれません。次に作曲者を知って茫然としました。あんなに美しい曲を作った人がこんな曲も作ったのか。

以下、作曲家については次回。ヒント：その作曲家の曲の楽譜を皆さんもお持ちです。

First Light

小林 力

First Lightとは新しい天体望遠鏡を夜空に向けて観測したい天体の最初の光を受けることをいう。半年ほど前に注文し、待ちに待ったeVscopeという天体望遠鏡が9月4日に届いた。しかし4日は曇り時々雨でFirst Lightはお預け、その後も曇りや雨の日が続き、未だにFirst Lightを実現していない。新しい天体望遠鏡を手に入れた者にとってこの大気的不安定な天候は実に残酷な仕打ちである。

「私の趣味と右脳の働き」と題したひまつぶしで紹介したように、eVscopeは反射望遠鏡の焦点に光を100倍に増幅してくれるイメージセンサーが装着されている。そのお陰で僅か11.4cmの口径ながら1.1mの口径の集光力に匹敵する優れものだ。11.4cmという小口径故にどこにでも持ち運びができる。遠い空の天体を見るためには暗い空が必要だ。私の場合家から1時間程度のドライブの範囲内にいくつか夜の暗い観測点の目星をつけている。そこへ運ぶのにこの望遠鏡のPortabilityはありがたい。しかも内臓コンピューターとGPSによって自律で天体の方位の認識、視野内のオブジェクトの自動認識をしてくれるので、セットアップも簡単だ。コンピューターのデータベースの中から見たいオブジェクトを選択すれば、たちどころにそのオブジェクトを視野に捉えて自動追尾してくれる全自動デジタル望遠鏡なのだ。

実は、向こう1週間の間に好天に恵まれなければ、First Lightが10月中旬以降までお預けになる。というのは、10日後に白内障手術を控えているからだ。

9月24日に右眼、10月1日に左眼を手術をし、術後2週間くらいは眼を酷使できない。

近年、視力の低下に悩まされていたが、最近ますますその傾向が強くなった。本を読んでいると眼が霞んでくる。夜空を見ても星が数えるほどしか見えない、三日月が何重にも見える。そこで思い切って眼の水晶体を最新の2焦点レンズと入れ替える白内障手術を受けることにした。術後は遠方と近方がよく見えるようになる。夜空の星々が美しく見えるはずだ。また望遠鏡のアイピースの像も見やすくなるはずである。本も読みやすくなる。こうなったら、いっそのことFirst Lightは眼の調子が良くなってからにしたいという気持ちもある。

というわけで、First Lightの機会を待つ間、仕方がないのでeVscopeで見たい天体について思いを巡らせている。見たいのは太陽系から遥か彼方の遠方の空Deep Skyである。Deep Skyでしか見ることができない天体のうち私が見たいのは主に次の3つのカテゴリーに属する。一つは銀河(Galaxy)、それから星雲(Nebula)、そして3つ目が球状星団(Globular Cluster)である。この3つの天体はなぜ面白いのか。

まず銀河だが、太陽系が属しているのはもちろん天の川銀河だ。天の川銀河は直径約10万光年の大きさで、約4000億個の星々でできている典型的なスパイラル銀河である。この宇宙には一体いくつくらいの銀河が存在するのだろうか。なんと約2兆個と推定されている。その大きさは1000万個程度の星々からなる矮小銀河から、100兆もの星々を抱えた超巨大銀河までである。銀河の中心には巨大ブラックホールがあると考えられている。平均的な大きさの天の川銀河には4000億個の星があるのだから、宇宙全体ではざっと4000億 \times 2兆=8 \times 10の23乗個の星が存在することになる。この膨大な星々の数から考えて、知的生命体が存在するのは太陽系だけということとはあり得ない。近年天の川銀河の星々を公転する太陽系外惑星(Exoplanet)が数多く見つかりつつある。その中には地球とほぼ同じ大きさで、主星から適当な距離の軌道にあって液体の水が存在しうる領域、いわゆるHabitable Zoneにある系外惑星もどんどん見つかりはじめている。このように地球規模でHabitable Zoneにある系外惑星は天の川銀河系だけで数10億個存在すると見積もられている。それ

らの多くは生命を育んでいるであろうし、知性を持つまでに進化した生命もあるに違いない。(この項続く)